



苦前町水田発祥の地 道北の農業史に輝く藤田万助翁の 偉業をたたえる石碑

苦前町で初めて米の収穫に成功したのは、明治17年(1884年)のこと。当時、誰も成し得なかった道北での水稲栽培に立ち向かい、その偉業を成し遂げた開拓者、藤田万助翁の功績をたたえ、苦前町香川の古丹別川のそばに「水田発祥之地」と記された石碑が建てられています。国道そばの高台にひっそりとたたずむ石碑は明治40年(1907年)に建立され、昭和43年(1968年)に修復再建された後、昭和59年(1984年)に現在地に移設されたもので、国道232号と239号の交差点から古丹別川に架かる苦前橋を渡り、苦前市街地方向に100mほど進んだ山側に建てられています。

苦前地方の農業は幕末にまでさかのぼり、庄内藩が農業移民の入植によって水稲栽培を試みましたが、成果を上げることはできませんでした。文政5年(1822年)に岩手県盛岡市で生まれ、幕末の安政年間に古丹別川尻で農耕を始めた藤田翁は明治14年(1881年)、水田を開き、水稲栽培を試みます。ところが、当時の北海道は石狩地方でさえ米は試作の段階で、上川や北空知地方では稲作を手掛ける農家すらない時代。道北という寒冷の荒野の中で、一人手製の農具で水田を作り、わずかな種もみで稲作に立ち向かった藤田翁の努力は並々ならぬものがありました。

何度も失敗を繰り返す中、その苦勞が報われたのが明治17年(1884年)。収量はわずかでしたが、開拓者とともに「白い飯」を腹いっぱい食べ、喜びをかみしめたと伝えられています。藤田翁の功績をたたえる石碑は翁の13年回忌にあたる明治40年に地元農家の有志によって建てられ、現在も道北の農業史に輝く偉業として伝えられています。

見どころ

昭和43年(1968年)に修復再建された石碑は高さ約3.5m。そこには建立当時に書かれていた漢文の碑文が今も記されています。内容は「道北地方でも米が作れることを証明した苦前地方の農業の先駆者」というもので、藤田翁の農業にかけた思いをたたえています。

ポイント

現在、苦前町ではななつぼし、ゆめびりか、おほろづきなどの品種が栽培され、タンパク値が低く、粘りのある良質の米として評価されています。これも不屈の精神で、稲作に挑んだ藤田翁の功績の賜物であることは言うまでもありません。

五感で感じる！ 風土資産の魅力

聴く 触る 味わう 嗅ぐ 知る

知る

石碑はオロロンラインを走行するドライバーには気付かれにくく、ひっそりと立っていますが、毎年農協青年部による清掃が行われており、その功績に対する住民の畏敬の念が感じられます。

■基本情報 (R3. 5)

文化財指定：町指定記念物
指定年月日：昭和55年9月18日
住 所：苦前郡苦前町香川